

# 天台法界觀の系譜

安 藤 俊 雄

## 一 互 具 の 論 理

天台教学の特異な法門を代表するものとして円融三諦とか十界互具や百界千如、あるいは一念三千などが古来重視されている。しかるにこれらの法門はそれぞれ聯関をもち、いづれも一即一切、すなわち個別的なものの一一のなかに全体が内具しているという原理を共通の基礎として成立するものである。このことは十界互具や百界千如とか一念三千という法界觀においてとくに顯著である。

十界互具というのは法界をば華嚴經十地品によって地獄界・餓鬼界・畜生界・阿修羅界・人間界・天上界・声聞界・緣覺界・菩薩界・佛界の十法界に分け、表面ではこれら十界がそれぞれ個有の独立した世界として差別されているが、内実において地獄界乃至佛界のいちいちのなかに他の九法界が内具されているから、十法界の一一が個別であるとともに全体であり、十法界の全体を自らのうちに内具する小宇宙である。したがって十界のいちいち他は他の九法界と互具の關係にあるというのである。かくて内実において一法界が十法界を内具しているから十法界によって構成され

ている法界全体は嚴密には百法界であることになる。法華經方便品のいわゆる十如是、すなわち如是相・如是性・如是体・如是力・如是我・如是我・如是我・如是縁・如是我・如是果・如是我・如是報・如是我・本末究竟等をばすべての法界の存在と認識の範疇であると考えたから、百法界には千如是がそなわっていることになる。これが百界千如という法門である。天台大師智顗（五三八―五九七）は三大部その他いたるところでこの十界互具や百界千如を説くとともに、また摩訶止観では日常現前の一念の心に三千世間が備わっていることをば十乘観法によって發得すべき不思議觀の妙境として表示し、これを不思議境と名付け、初發心住の位に入つてはじめて觀得できるもので、この不思議境たる一念三千の理法を觀得することを天台止観の目標としたため、古來天台法門のなかで一念三千がもっとも重視された。ここにいう三千というのはさきの百界千如に智度論卷四十七の三世間、すなわち住処世間、衆生世間、五蘊世間の三世間を掛け合せたものであつて、正しく云えば三千世間のことである。いかに微細の一念心といえども、そのなかに十法界・百法界・千如・三千世間が本具しており、一即一切であり、個別がそのまま全体であり、有漏陰妄の一念心といえども有漏の法界はもとより無漏の佛法界を本具しているから、煩惱のままに菩提であり、生死のままに涅槃であるというのが一念三千の趣意である。摩訶止観は修道の便宜上、觀心の方法にしたがうので、一念心が三千世間を本具するというのを不思議境として示したが、觀心でなく觀色の方法にしたがう場合は、すべての色法がいかに微少なものであるにもかかわらず、世間を本具することが不思議境であらねばならぬから、この場合は一色三千と云わねばならない。

かくの如く十界互具や百界千如とか一念三千という法門は一即一切、すなわち個別即全体という論理によって形成されており、その場合相即は一と一切、個別と全体とが互具の關係にあることによって成立している。この互具の論理こそ天台教学の中核をなすものであつて、智顗はあらゆる講説のなかでこれを縦横自在に駆使している。この互具の論理を智顗は何から学びとつたのであらうか。智顗は天才的な獨創的精神の持主であつたから、あるいは彼が新しく發明した獨創的な思想であつたかも知れない。しかし或いはほかに經論のなかに智顗が發見した論理であつたかも知

知れない。一即一切の思想は一般的な原理としては各種の大乗経論が共通して説くところの公式的な原理であり、特に維摩經のなかには芥子のなかに須弥山を容れると説き、しかも煩惱と菩提、生死と涅槃という矛盾対立する両極の絶對的な不二と相即の關係を教えている。智顗ははじめて天台山に隠棲するようになってから維摩經に特別の関心を寄せ、別伝によれば天台山で毎夏これを講説し、晩年には晋王広の要請に応じて維摩經に関する数部の著作を撰述したほどであるから、さきの互具の論理を組織するに当っては彼の維摩經研究からの大きな影響があったにちがいない。しかし一即一切とか個別即全体という思想を維摩經その他の大乘經典に拠って組織したにしても、互具の論理は嚴密にはこの思想とは別箇のものであり、むしろ一即一切の思想の論理的な根拠として智顗が新しく説いたものである。いまわたしが究明しようとするのはこの互具の論理が智顗の独創であるか、それとも何か経論に拠ったのであるか、もし後者とすればその経論は何であるかという問題である。

## 二 華嚴の蓮華藏世界

智顗は独創的な構想力に富んだ天才であつたから、互具の論理を新しく自分で発想したかもしれないが、晩年の講説や著作のなかで智顗が界如三千の法界觀をとくとき、なにかすでに一つのはっきりした具象的なイメージが彼の頭のなかに描かれており、そのイメージにしたがって法門を説示しようとする熱意と迫力がひしひしと感ぜられる。そのイメージは智顗の生涯において学問的進歩の上に重大なる意義をもったと伝えられる大蘇山での開悟か、或は天台山へはじめて入山した直後の華頂峰の開悟のときに発得したものであると推定すべきかも知れない。しかし大蘇山の開悟は別伝の記録によれば専ら法華三昧の修行によるものであつて、十法界が互具し円融しているというような法界觀の形成とはあまり密接な關係があつた形跡はない。また華頂峰の開悟も不思議な梵僧から一実諦の法門を授かつたという神祕的な靈感の体験であつて、この一実諦の法門というのはたとえば法華玄義の迹門十妙の第一の境妙として

挙げられている六境、とくに円融三諦の法門とは関係があるとしても、これはあくまで抽象的な実相真理に関する法門であって、われわれがいま問題とする具象的な十界互具という法界観のイメージとは直接の関係はない。少くとも史料に拠るかぎり大蘇開悟も華頂開悟も十界互具や百界千如など一連の天台法界観の組織に直接の影響を及したとは考えられない。

そこでまづ念頭に浮ぶのは智顗が生涯を通じて根本所依として重視した法華経の浄土である。けだし十界互具などの法界観は摩訶止観によれば見道たる初発心住に入った菩薩のみが見ることのできる不思議境であり、これこそ天台の円頓止観の目標とする理想境であるというから、この円頓止観を法華経実践観心門とするかぎり、法華経が教える理想浄土こそ天台法界観に最も密接な関係があつて然るべきである。ところが法華経では一見したところ浄土に関する教説は甚だ貧弱であつて、わづかに見宝塔品の三变土田や如来寿量品の自我偈の衆生見劫尽、大火所焼時、我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閑、種種宝莊嚴、云々の偈が法華経の浄土を描写しているにすぎない。これらの経説はいづれも娑婆世界がそのまま浄土であることを暗示したものであるが、理想世界の描写としては内容があまりにも公式的であり貧弱であると云わねばならない。ただ娑婆と浄土の相即を暗示するのみであつて、これから十法世界の互具の思想が生れたとは考えられない。だから天台の法界観の根柢を法華経以外のところに求めなければならない。

そこでわたしは天台の互具思想の根柢は華嚴経蓮華藏世界であると考えたい。それは第一に華嚴経の蓮華藏世界と智顗の法界観と驚くほど近似していること、第二に智顗がその学的生涯の始終に亘つて、いつも理想世界を説くに當つて華嚴経を範とすべきことを記している事実などによるものである。もっとも蓮華藏世界と云つても華嚴経の蓮華藏世界のほかに、梵網経に全く別種の理想世界として蓮華台藏世界なるものが説かれており、智顗が後者の蓮華台藏世界についても充分知悉していたことは、彼が三大部などでしばしば梵網経に言及し、しかも隋天台智者大師説、門人灌頂記という撰号のある梵網菩薩戒義疏二巻などが現存することによつても明白である。菩薩戒義疏二巻が智顗の

真撰であるか否かについて多少疑問があるとしても、智顗がしばしば梵網經に言及している以上、蓮華台藏世界を知っていたことは確実であり、法華文句卷九下（大正三四・一二八a）ではこの理想世界について閑説している。もともと蓮華台藏世界の思想は華嚴經の蓮華藏世界の思想を基にして新しく発展したものであると推定されているほどであるから、両者の思想は本質的には同じ血統に属しているので、蓮華台藏世界にも互具の思想が顕著に示されている。しかし蓮華台藏世界は廬舎那佛の坐す華台の周辺にある千葉の蓮華のなかに千世界を見するという特殊な世界観であって、智顗の十法界互具という法界観はむしろ晋訳の六十華嚴の世間淨眼品に描き出されている美しい幻想的な寂滅道場の光景や、廬舎那品の蓮華藏世界の思想であつたと推定される。

佛陀が寂滅道場ではじめて正覺を成就されるや、たちまちその道場が美しい蓮華藏世界と化した。普賢菩薩など佛陀の本身たる廬舎那佛の宿世の善友たる大菩薩や天龍など八部衆が佛陀を囲み、それぞれ讃歌を捧げて佛陀の正覺成就を歡喜する。そこで佛は無量の光明を放つてまづ蓮華藏世界を見せしめ、次いで東西南北等の十方世界に同じように無量の諸佛と菩薩があり、これら諸菩薩が佛所に来て供養礼拝して着坐するを見せしめる。このとき普賢菩薩は佛の威神力を被つて世界海について説法し、世界海と云つても佛の莊嚴のなかに住する世界もあれば、虚空のなかに住する世界もあり、光明や業や水輪や菩薩の天冠のなかに位置する世界もあり、したがって世界海の形にも種々あつて正方形の世界海、あるいは円形、あるいは非方円、あるいは花形、あるいは衆生の形をした世界海もあると説く。さらにこれら世界海には衆宝を体とするもの、一宝を体とするもの、地輪を体とするもの、衆香を体とするものなどの相違があること、また世界海の莊嚴にも雲のような物質を以てする莊嚴や衆生の行業を以てする莊嚴もあり、あるいは諸佛や菩薩の願力を以て莊嚴されたものもあり、これら世界海にはすべて無数の諸佛が出現していると説く。

ここで普賢菩薩はいよいよ蓮華藏世界の説明に入り、まづこの蓮華藏世界なるものをもと廬舎那佛が菩薩たりしとき無数の如来のところで無数の願行を修せし果報として成立したものであることを明にし、次いでその構造を説明す

る。まづ無数の風輪が層を成し、その最上の風輪の上に大きな香水海（水輪）があり、そのなかに大蓮華があつて、そのなかに蓮華藏世界海があり、周囲には金剛山が取り巻いている。蓮華藏世界海の大（地輪）には無数の香水海があり、そのなかに美しい宝華、樓閣、城があり、一一の香水海は無数の香水河に取り巻かれてゐる。しかもこの香水海の上には無数の世界性があり、あるものは蓮華の上に、あるものは真珠寶、宝網の上に住し、あるものは種々の衆生身のうちに住している。だから須弥山の形をしている世界性もあれば、河の形をした世界性もあり、輪形・樹形・樓觀形の世界性もあり、あるいは雲や網の形をしたものもある。しかるにこれらの香水海のなかに樂光明香水海があり、その上に離垢淨眼広入佛の住む清淨宝網光明世界海があり、かくしてさらに上に十八の香水海と世界性が層を成しているから、総じて二十層の香水海の層があることになる。十方世界の香水海も同様な構造をなしており、この全体の香水海が盧舍那佛の常に法輪を転ずるところであるという。これが世間淨眼品及び盧舍那品の世界海の思想である。以上によつて華嚴經の世界海に二種類があることが知られる。第一は須弥山や河や衆生の形をしている世界海であり、第二は蓮華という花の形をした世界である。上に述べたところによつてこの花の形をした蓮華藏世界は華嚴經の世界海の一つにすぎず、世界海としては別に人間や樓閣や樹木の形の世界海もあることになる。したがつて華嚴の淨土はただ一義的に蓮華藏世界のみを説いているわけではない。華嚴宗の賢首大師法藏（六四三—七二二）の華嚴經探玄記卷三（大正三五・一五八）及び華嚴一乘教義分齊章卷三（大正三四・三四八）によれば、一般に華嚴經の説く世界海には二種類があるという。第一は毘盧舍那佛自体の住む淨土そのもので、これは淨土とも世界海とも名付く可からざる不可説の境界であるが、仮りにこれを国土海と名付ける。しかしこの国土海は唯佛与佛のみが見得る国土であつて毘盧舍那佛の果位に至つて自証すべきものである。第二はこの国土海を因位の立場に寄せて説示したもので、これに次の三類がある。第一は上に挙げた蓮華藏世界海であり、第二は蓮華藏世界海の外側を取り巻いている十重世界である。これは世界性・世界海・世界輪・世界円満・世界分別・世界旋・世界転・世界蓮華・世界須弥・世界相の

ことであつて、これらの十重世界は華嚴では蓮華藏世界の外側ではなく内側にあるべきものとしてゐる。さらに第三は須弥山や樹木や衆生の形をした世界海であつて、これを無量雜類世界と名付けてゐる。これもすでにさきに述べたところである。

これは法藏が華嚴經に散説されている淨土、あるいは世界海の教説を系統的に類別したものであつて、たしかに華嚴經には法藏の指示したように各種の淨土が説かれていて、その教説はいちぢるしく複雑であつて、他の淨土思想、例えば兜率淨土や西方淨土の教説のように淨土の内容が一義的に説示されていない。しかし華嚴經の淨土教説は全体的に云えばやはり蓮華藏世界の描写に中心を置いているというべきであつて、天台智顗も維摩經文疏の佛国品の釈のなかで淨土義を八門に分別して詳説するなかで蓮華藏世界こそ実報無障礙土であると明言しているほどである。（大正・三八・五六三。略疏卷二）智顗が華嚴經の蓮華藏世界から学びとつたのは互具の論理である。すなわち本經卷三の盧舍那品には既述の如く世界海といつても常識でわれわれが考えるような広汎な世界、つまり虚空のなかにある一大法界のみが唯一の世界であるのではなく、花の形をした世界海もあれば人間や動物の形をした世界海もあり、菩薩の天冠のなかにも掌のなかにも世界海があつて、その世界海の内容と構造は一大法界の構造と全く同一であるという。佛陀が正覺を成じて盧舍那佛の相を現すれば、寂滅道場の山川草木をはじめ如来を取り巻く宿世根熟の天龍等の八部衆も法身の相を現じ、空に浮ぶ無數の雲のなかに如来が姿を現じ、菩薩や天龍等の八部衆とともに佛陀の正覺成就を讚美し祝福する。蓮華藏世界の東西南北にある十方世界にも十佛があり十大菩薩や十八部衆があつて同様に佛陀を讚美し祝福している。なんという美しい幻想的な淨土の光景であらうか。しかも山も川も人もも流れる水もみな蓮華藏世界と同じ内容と構造をもっている。どんな微少な微塵でも大法界たる蓮華藏世界と同じ内容と構造を具えている。盧舍那佛品第二の二の普賢菩薩の偈に於此蓮華藏 世界海之内 一一微塵中 見一切法界と説き、あるいは其他一一微塵中 一切佛刹亦悉入と説いているのもかかる理由によるのである。

すべてのものがどんなに微小なものでも自己のそれに蓮華藏世界の全体を具備するがゆえに、一即一切であり、大宇宙と小宇宙とが広と狭の差別をもちつつ本質的に一体であるという華嚴經の蓮華藏世界の思想こそ、天台智顗の十界互具の思想の基盤であつたのではないか。十界互具の思想が蓮華藏世界の構造と極めて近似していることは何人も否定することのできない事実である。ただ偶然の一致であると云えばそれまでであるが、偶然の一致としてはあまりにも近似しているし、智顗が自ら創説したとするには、あまりにも大胆であつて、智顗が尊重した法華經や維摩經のなかに原則的なことが説かれているとしても、そこから直ちに十界互具の思想を説くには、あまりにも飛躍的でありすぎる。そこで十界互具という天台法界觀は華嚴經の蓮華藏世界の思想を基礎として組織したのではないかと推定される。

### 三 天台智顗と華嚴經

むかしから天台学者は天台教学と華嚴經との間にさまで密接な関係があることに注意しなかつた。それは智顗の五時八教の教判において華嚴經が従来の別格的地位から引きずり下されて、本經がただ部としてのみ頓であることを認めても、頓教の相は必しも華嚴經の独占に非ずして、五時説法のなかで鹿苑時を除く華嚴時、方等時、般若時、法華涅槃時の四時の説法も頓説の教に属するものであり、華嚴經の主要内容は円教であるとしても、行布次第の別教を含む点で円兼一別の教であつて、一行即一切の頓悟の教としてはむしろ純粹円教である法華經を挙ぐべきであるとしたためである。天台学者が古来とかく華嚴經に対してあまり重大な関心を寄せなかつたのはこのためである。華嚴宗第四祖たる清涼澄觀（七三八—八三九）が天台法界觀の根拠となつたものが華嚴經であることを指摘しても、天台第六祖荊溪湛然（七一—七八二）が極力これを否認して止まなかつたことは湛然の止觀義例卷下の第七喻疑顯正のところで明白である。（大正四六・三五三a以下）



ところが孜細に検討してみると智顗の思想と華嚴經との関係は意外にも密接であり、しかも智顗の学的生涯の始終に亘って彼が華嚴經に拠るところが多かったことが知られる。すなわち智顗が大蘇山からはじめて金陵に入って講説した次第禪門卷第一上の修禪波羅蜜大意第一にしきりに挙げている十波羅蜜は華嚴經の十波羅蜜を指しているし、(大正四六・四七七a b) 同じく金陵で撰述した六妙法門の第九の円觀六妙法門では經証として華嚴經を挙げ故華嚴經云、初発心時、便成正覺、了達諸法真実之性、所有惠身、不由他悟と云ひ(同上・五五四b)、第十の証相六妙門では六妙門の証悟を初証・中証・究竟証の三段階に分け、初発心住の証悟を初証、他の九住及び十行、十廻向、十地、等覺の証悟を中証、妙覺位の証悟を究竟証とし、初証について

初心菩薩、入是法門、如經所説、亦名為佛也。已得般若正恵、聞如来蔵、顯真法身、具首楞嚴、明見佛性、住大涅槃、入法華三昧不思議一実境界也。広説如華嚴經中所明(大正四六・五五五b)

と云い、究竟証についても璽珞經、法華經、大品般若經、涅槃經とともに華嚴經を引いて

華嚴經云、從初地、悉具一切諸地功德(同上・五五五c)

さらに修習止觀坐禪法要のなかでも上に引いた華嚴經の文を掲げて初発心住の証果を説明している。(大正・四六・四七三a)

国清百録卷一に収められている敬礼法や普礼法は智顗が天台山に入山して後、天台学場の清規として制定したものと推定されるが、先づ敬礼法には

敬礼常寂光土毘盧遮那遍法界諸佛

敬礼蓮華藏海盧舍那遍法界諸佛

と規定している。さらに普礼法に至っては前後十五科のすべてが華嚴經の報身佛たる盧舍那佛を対象としたもので、一、普礼十方三世諸佛寂滅道場上盧舍那佛

二、普礼十方三世諸佛普光法堂上盧舍那佛

三、普礼十方三世諸佛忉利天上盧舍那佛

四、普礼十方三世諸佛炎摩天上盧舍那佛

五、普礼十方三世諸佛兜率陀天上盧舍那佛

六、普礼十方三世諸佛他化自在天上盧舍那佛

七、普礼十方三世諸佛重会普光法堂上盧舍那佛

八、普礼十方三世諸佛祇洹林間善財童子盧舍那佛

九、普礼十方三世諸佛七処九会円満頓教盧舍那佛

一〇、普礼十方三世諸佛虚空不動戒藏盧舍那佛

一一、普礼十方三世諸佛虚空不動定藏盧舍那佛

一二、普礼十方三世諸佛虚空不動慧藏盧舍那佛

一三、普礼十方三世諸佛娑佛得菩提善心常不退盧舍那佛

一四、普礼十方三世諸佛娑佛薩婆若入大総持門盧舍那佛

一五、普礼十方三世諸佛娑佛息諍論入大和合海盧舍那佛

願諸衆生三業清淨、奉持尊敬、和南佛法賢聖僧（大正四六・七九五a b）

と規定している。これが普礼法の全文である。これによって智顗が初期の講説時代はやくも華嚴經に重大なる関心を寄せ、ことに初発心住の証悟のモデルとして華嚴經に拠るところがあったことが明らかとなった。華嚴經伝記卷五において法藏も智顗が華嚴經に特別の関心を寄せたことに注目し、法藏以前の諸師が著した華嚴関係の疏記を挙げるなかで、

## 普礼法一十五拜

右天台山智顗禪師所撰、其拜首皆称普礼、末皆称盧舍那佛、其間具引寂滅道場等七処八会之名、今江表盛行、不復繁叙、顗仍判華嚴、為円満頓教云々（大正五一・一七二a）

と云っている。はたして智顗が法蔵の云うが如く華嚴經を円満頓教であるとしたか否かは問題であるが、智顗が当時本經に対して従前にも増して重大なる関心を寄せたことは事実である。これら十五拜のうち第一拜から第八拜までは華嚴經の全体を会座によって総括したものであって、すなわち寂滅道場とは世間淨眼品及び盧舍那品の会座であり、第二の普光法堂会は名号品から賢首品までの会座、第三の忉利天は昇須弥山頂品から明法品まで、第四の炎摩天は夜摩昇天品から十藏品まで、第五の兜率天は兜率昇天品から十廻向品まで、第六の他化自在天は十地品から宝王如来性起品まで、第七の重会の普光法堂は離世間品の会座であり、さらに第八の祇洹林は入法界品の会座である。第一拜から第八拜までは七処八会の説主を盧舍那佛と見たものであり、第九拜は華嚴經全体の教法、第十拜、第十一拜、第十二拜までは戒定慧の三藏、第十三拜、第十四拜、第十五拜は佛法僧の三宝を盧舍那佛と見たものである。第九拜以下の教法、三藏、三宝を盧舍那佛と見るのは奇異の感があるも、これは華嚴經第六淨行品の偈頌に

自歸於佛、当願衆生、体解大道、発無上意

自歸於法、当願衆生、深入經藏、智慧如海

自歸於僧、当願衆生、統理大衆、一切無礙

という三歸依の偈文があり、その続文に戒定慧の三学成就の願文があるので、これに拠って三藏と三学を成就せる盧舍那佛を礼拝の対象としたと推定される。かくの如く智顗が華嚴經について深い造詣と重大な関心を寄せたことが知られる。とくに注意すべきは智顗がただ自ら本經を研究し門人達にも本經を尊重すべきことを強調したのみでなく、国清道場の清規たる普礼法を全く華嚴經に拠って制定し、専ら盧舍那佛の礼拝をすすめたことであって、華嚴思想が

当時の智顗においては単なる研究の対象以上のものであったことを示している。

#### 四 界如三千説の成立基盤

晩年の智顗の思想においても華嚴經が極めて重要な地位を占めていたことは摩訶止観の十乘觀法の第一観不思議境の不思議境たる一念三千が華嚴經に拠つて組織されたことを智顗自らが記していることによって明白である。すなわち摩訶止観卷五上には、

不可思議境者、如華嚴云、心如工画師、造種種五陰、一切世間中、莫不從心造（大正四六・五二c）

という。この經文は華嚴經第一〇夜摩天宮菩薩說偈品の如来林菩薩の唯心偈であつて、この偈は智顗が三大部その他でしきりに引用している。摩訶止観では一念三千という觀心の原理の経証としてこの唯心偈を挙げたのである。さきに述べた如く初期以来智顗は十住位の第一初発心住位（見道位）の境界についてはいつも華嚴經の教説を範とした。いま摩訶止観の十乘觀法の当面の目標も不思議境を觀得して初発心住位に入る点にあるのであるから、この場合にも智顗は華嚴經の教説を念頭に浮べていたのである。

摩訶止観の観不思議境を説く文はつぎの二段に大別される。第一段ではまず心が一切法を生ずとする小乗及び大乘の思議境を挙げ、第二段に入つていよいよ不思議境を明すのであるが、湛然の輔行によればこれも七項に区分することができ。第一項では総括的に理境としての不思議境を明すのであるが、さらにその文を四段に分け、第一に所依の教についてまづ

不可思議境者、如華嚴云、心如工画師、造種種五陰、一切世間中、莫不從心造

と云いて、さきの華嚴經夜摩天宮菩薩說偈品第一六の如来林菩薩偈を円頓止観の理境の範であるとしている。さらに第二文において止観が目指す境の名目としてまづ十法界を挙げてこれを釈し、第三文では十法界に包含さるところ

三世間と十如を説明し、最後の第四段において一念三千を説いて

夫一心具十法界、一法界又具十法界、百法界、一界具三十種世間、百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已、介爾有心、即具三千、亦不言一心在前、一切法在後。亦不言一切法在前、一心在後。例如八相遷物、物在相前、物不被遷、相在物前、亦不被遷。前亦不可、後亦不可。祇物論相遷、祇相遷論物。今心亦如是。若從一心生一切法者、此則是縱。若心一時含一切法者、此即是橫。縱亦不可。橫亦不可。祇心是一切法。一切法是心故、非縱非橫、非一非異、玄妙深絕（大正四六・五四a）

という。これが智顗の不思議境たる一念三千の法門の成立するまでの論述過程である。不思議境は藏通別の三教の思議境に対して円教の証悟内容として掲げられたものである。四教は共通して一切法が心から生ずるといふ唯心論を説くが、円教の唯心論のみが不思議境に値するものであって、心と一切法とが前後の關係にも非ず並立の關係にも非ずして不縱不横の關係にあることを強調するために、華嚴經の唯心偈を範として挙げたのである。しかし十法界の互具や百界千如及び一念三千の法門を組織するには個別と全体、一と多の互具と互融の論理に拠らなければならなかった。この論理はまさしく智顗が華嚴經の第三會たる忉利天宮會（十住會）に属する初発心菩薩功德品から借用したものであると推定される。すなわち初発心菩薩功德品には初発心の功德を十一段に分けて校量しているが、そのなかに

初発心菩薩功德之藏、不可得知。何以故初发心菩薩、不齊限、為爾所世界衆生故、發菩提心。悉為十方一切世界衆生故、欲度一切衆生故、欲分別知一切世界故、發菩提心。欲知微細世界即是大世界、知大世界即是微細世界、知少世界即是多世界、知多世界即是少世界、知広世界即是狭世界、知狭世界即是広世界、知一世界即是無量無邊世界、知無量無邊世界即是一世界、知無量無邊世界入一世界、知一世界入無量無邊世界、知穢世界即是淨世界、知淨世界即是穢世界、於一毛孔中悉分別知一切世界、於一切世界中悉分別知一毛孔性、知一世界出生一切世界、知一切世界猶如虛空、欲於一念知一切世界、悉無有餘故、發阿耨多羅三藐三菩提心（大正九・四五〇c）

という。この經文のなかで特に菩薩が菩提心を発すのは、微細世界が大世界であり、少世界が多世界であり、広世界が狭世界であり、一世界が無量世界であり、無量世界が一世界に入り、一世界が無量世界に入り、穢世界がそのまま浄世界であることなどを一念のうちに悉く知らんがためであると説いているところは、そのまま摩訶止観の一念三千の論述にびたりと合致している。どんな微細なものでも一のなかに広大な大世界を具しているのを一念のうちに知るのが初発心住菩薩の功德であるとする華嚴經のこの教説こそ摩訶止観の一念三千という不思議境の内容と完全に一致するものである。広狭無礙と一多相容の思想は智顗が終生愛読した維摩經にも説いているが、華嚴經ほどこの思想を集中的に広説している經典はほかにないのであって、しかも華嚴經の初発心住の功德を説くところにこの教説が見出されるのであるから初発心住の証悟内容たる不思議境を説くにあたって智顗が初発心菩薩功德品の教説に拠ったであらうと推定するのは充分根拠のあることと信ずる。

## 五

天台智顗が、一念三千の法門を組織するに当って主として華嚴經に拠ったことは上によって明瞭である。その場合智顗は一念の心と三千世間との関係を縦や横の関係において把えようとする小乗や大乘の思議境と区別するために、先づ華嚴經の唯心偈をば不思議境の教証として掲げた。けれども唯心偈そのものは表面から見ればただ心が五蘊を造るというのみで特に思議境としての唯心説と異なる特質が明かに説かれているわけではない。そこで智顗はさきの初発心菩薩功德品の広狭無礙と一多相入の原理に拠り、この原理こそ不思議境をして不思議境たらしめる円教特異の法門であると考えたにちがいない。ことに世間浄眼品や盧舍那品の蓮華藏世界の教説は智顗にとっては不思議境の具象的なイメージであつたにちがいない。つまり華嚴經菩薩說偈品の唯心偈と初発心菩薩功德品の広狭無礙などの法門が原理的根拠、世間浄眼品や盧舍那品の蓮華藏世界が具象的なイメージとなつて組織されたものが天台の十界互具・百界

千如、一念三千の法門であるというべきである。智顗が三大部などの講説において力強く十界互具や百界千如、あるいは一念三千の法門を縦横に説いたのはまことに華嚴經の教説を範としたからであって、とくに蓮華藏世界のイメージが生き生きと智顗の脳裡に印象付けられていたからである。はじめて金陵において撰述した六妙法門以来、彼は華嚴經に拠って初発心住の証悟内容を理解すべきであると説いた。このことは智顗の晩年の講説に至るまで終始不變の信念であった。してみると摩訶止観の一念三千説こそは華嚴經の上述の如き教説を媒介として始めて正しくその意義を把握することができると云わなければならない。しかも智顗において華嚴經の蓮華藏世界は初住の証悟内容であったという事実を忘れてはならない。さきに述べた如く六妙法門でも初住の証悟をば華嚴經に拠って理解すべきであるという指示した。小止観においても同様であった。智顗の最後の撰述である維摩經文疏の佛国品の釈のところで浄土義を八重に分けて説明しているなかで、一般に浄土をば同居土、有余土、果報土、寂光土の四種に分け、果報土の範として華嚴經の因陀羅網蓮華藏世界を挙げ、さらに十地經論の七種清淨義に言及し、別教の初地、円教の初住の菩薩がはじめてこの果報土に往生すべきことを強調している。(大正三八・五六四) しかしこの蓮華藏世界は一実諦を悟って無明を断ずることによって得るところの果報ではあっても、まだ無明を完全に断じ尽しているわけではないから、厳密な意味の純粹な浄土ではない。果報土は初住から等覺までの菩薩の住む浄土であって、そこには微細な無明が断尽されないまままで働いている。無明が全く断尽した純粹なる浄土は妙覺位の如来のみが住むのであるという。かくの如く智顗が果報土と浄土を厳密に区別するのは三賢十聖の住む世界を果報土、唯佛一人のみ住む世界を浄土とする仁王般若經に拠ったものである。したがって厳密に云へばさきの蓮華藏世界も果報土であって、佛のみ住む浄土ではない。しかし、これはもともと華嚴經の趣意にも合致するものである。すなわちさきに引いた法藏の説によれば果分十佛の浄土は不可説であってこれを世界海から区別して国土海と名付け、蓮華藏世界や十重世界などは如来摂化の範圍に約して説示したものであって、その限りににおいて因分可説の限界内にあり、因分可説の限界内にある限り微細なる無明

を未だ完全に断除しない立場に寄せて説示された浄土であるにすぎない。六妙法門でも智顗は華嚴經を初証の經証として挙げたが、究竟証の經証としてやはり華嚴經を挙げている。これは智顗が華嚴經のなかに蓮華藏世界のほかに佛位に入つてのみ証悟すべき果分不可説の浄土を明確に看取していたからである。

晩年に至つて彼の法華教学が円熟し五時八教の教判体系が完成するに及んで、さすがに華嚴經に対する批判と法華經優越の自覚が深まり、仁王經のいわゆる唯だ佛のみが住む浄土をば普賢觀經に拠つて常寂光土と名づけたが、この常寂光土も華嚴經第二会に説く果分不可説の十佛自体の国土海に相応していることを憶えば、智顗の天台教学と華嚴經との關係が意想外に密接であることを知るのである。いづれにしても天台教学の中心法門たる十界互具・百界千如、ことに一念三千の法門の成立が初発心住の菩薩の証悟を説く華嚴經の教説なしには正しく了解できぬことを注意すべきである。

(この研究は昭和三十九年十二月大谷大学佛教学会で発表したものである)